



発行所  
 社団法人 国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都渋谷区東1-13-1-402  
 振替 00170-1-60507  
 電話 03 5468-6230  
 F A X 03-5468-1470

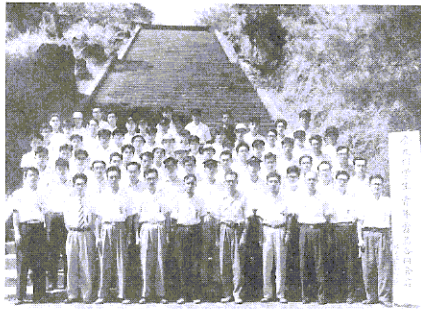
月刊「国民同胞」編集部  
 毎月一回10日発行  
 購読料 年間2000円

### 「合宿教室」発祥の地、霧島にて開催される

#### 第五十一回全国学生青年合宿教室

合宿運営委員長 藤 新 成 信

鹿児島県霧島市牧園町、ホテル霧島キャッスルにて開催された第五十一回全国学生青年合宿教室は、九州はもとより全国各地から集ふた総勢一九一名の学生・社会人によって営まれた(八月二十四日、二十七日)。昭和三十一年の「全九州学生青年合同合宿」(第一回合宿教室)が霧島の地で開かれたことに因んで、記念すべき「第五十一回」の開催地としてこの地が定められた。天孫降臨の霊峰高千穂の山懐に抱かれた会場で、地元の方々の御理解を頂き合宿は展開された。例年の産経新聞社に加へて、今回は霧島市と霧島市教育委員会(霧島市の前田終止市長は亜細亜大学の御卒業で同大学教授の小田村寅二郎前理事長の薫陶を受け、本合宿教



「全九州学生青年合同合宿」(昭和31年8月)

演・コンサート「唱歌でたどる日本のこころ」が開催された。宮崎大学

助教授吉田好克先生の御講話とテノール歌手山本健二先生の歌唱に、合宿参加者に加へて三百名を越す地元の方々も耳を傾けた。会場は家族連れも多く満席となったが、国文研が半世紀にわたって取り組んできた日本人としての精神的一体感、「国民同胞感」の世界が自づと現出された公開講座となった。

合宿教室はまづ、開会式直後の山口秀範氏による合宿導入講義でスタートした。諸外国を例に「人は誰でもルーツを求めろ」が、日本人のルーツ(根)は何かが提起され、天孫降臨の地・霧島を舞台にした神話と歴史にふれながらの講義に参加者の姿勢は整へられて行つた。日本人としての精神的ルーツに思ひを馳せるといふのが、今回の合宿の基調テーマでもあった。次の岸本弘氏による古典導入講義では『古事記』上巻「わたつみのいるこの宮」の箇所が採り上げられた。この講義を受けて続く班別研修では『古事記』の輪読が行はれた。

二日目の午前は拓殖大学日本文化研究所所長井尻千男先生の御講義「戦後論・共同体解体の六十年」を聴講した。先生は占領政策の中で行はれてきた共同体解体といふ諸事実を

挙げられ、その中で現代日本人がいかに生きて行くべきかをお説きになり、質問にも答へて下さった。先生には学生班の班別討論にもご参加頂いたことは望外の喜びであった。そして青山直幸氏による短歌創作導入



「第51回全国学生青年合宿教室」(平成18年8月)

講義の後、バスに乗り込み短歌創作を兼ねて、野外研修へ出発した。霧島神宮の参道階段で記念撮影、神宮に参拝した後、高千穂河原へと向ひ、高千穂の霊峰を間近に仰ぎつつ悠久の古に思ひを馳せたのであった(その後、前述の「みやまコンセール」に移動)。夜の「日本の国柄」と題する山内健生氏の講義では国史を貫く

「みたみ安かれ」の歴代天皇の祈りの系譜が示された。

三日目の朝は占部賢志氏による講義「生き方の鏡としての歴史」では近代日本に命をささげた河村幹雄博士と市丸利之助少将の思想と人生が辿られ、その後の班別討論を通じて各参加者の胸にさらに深く刻まれて行った。午後の折田豊生氏による創作短歌全体批評では、正確な表現に心掛けるべきことが指摘され、例示された参加者の歌の数々に皆の心は何時しか打ち解け、その後の班別の短歌相互批評へと展開して行った。夜は慰霊祭を前に宝辺正久先生が「学問と友情」と題する御講話で亡き師友を偲び本会の道統を回顧された。ついで全ての御祖先のみ霊をお祀りする慰霊祭の斎庭へと参加者は向った。その後の班別懇談では研修の感想が語られるなど夜の更けるまで語らひは続いたのであった。

最終日は参加者による全体感想自由発表が行はれ、若き友らの瑞々しい感想が次々に発表された。各々思ひを新たに学業に仕事に取組みたい旨が披瀝され、今後の研鑽と再会を期して合宿の全日程を終へた。来年の合宿が今より待たれるのである。

(日章工業(株) 取締役社長)

## 合宿教室のあらまし

### 〈第一日目〉 開会式

第五十一回全国学生青年合宿教室は明星大学四年高橋佑太君の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して小田村四郎会長は「第一回合宿を行ったこの霧島の地で合宿教室を開催出来たことを嬉しく思ふ。北朝鮮のミサイル発射、中国の軍備増強等々、日本を取り巻く国際環境は厳しい。様々な問題について、自分の頭で考へ、自己を確立することが大事である。交流を深め、本当の心の友を作ってほしい」と挨拶した。地元・霧島市の前田終止市長は「私も学生時代にこの合宿教室に参加したが、日本の文化伝統を学び、自らを鍛へ多くのいい友と出会って欲しい」と歓迎の意をこめつつ激励された。九州工業大学四年林祥人君は「自分の気持ちを率直に語り、仲間の言葉を素直に聞く事で、初めて心から付き合へる友となれる。素晴らしい合宿にして行きます」と呼びかけた。

### 合宿導入講義

「霧島でたどる歴史と日本のこころ」

(佛寺子屋モデル代表世話役 山口秀範先生)

先生は、まづ五十年前の第一回合宿教室で小田村寅二郎前理事長が混迷の時代に指標を得るためには「知識と情意と肉体をも統一させるスピリットを持って」と訴へられた事を紹介された。ついで米国の黒人作家A・ヘンリーの著書『ルーツ』に触れ、移民・奴隷の子孫が大半のアメリカ人も自らの祖先の歴史を尋ねルーツ(根)を求めてみると話された。

そして霧島を舞台とした日本人の原点を辿られ、天孫邇邇(ニニギハヤヒ)命降臨の神話、皇統を守るために生命を賭けた和氣清麻呂の史実を語られた。さらに昭和六年、霧島に程近い鹿児島湾上を夜間軍艦で帰京になる昭和天皇を松明の灯りで奉送する沿岸の村人と、それに応へんとされる昭和天皇との「君臣無言のわかれ」のエピソード等々を紹介された。そして、神代の世界から第百二十五代の今上天皇まで、神話と歴史が繋がっている世界にも稀有な国であると指摘され、「日本人は先祖がそれぞれの立場で精一杯、その時代を支へた人々であったと信じていることができる歴史を持つてゐる」と結ばれた。

### 古典輪読導入講義

「古事記『わたつみのいろこの宮』」

元富山県立富山工業高校教諭 岸本弘先生  
冒頭、先生は「天孫降臨」の段を朗々と暗誦され、師事された廣瀬誠先生に言葉がほとばしるやうな朗誦で、ただ耳を傾けて古事記の世界にひきこまれて行った」と語られた。そして、「その歌謡のすばらしさも是非味

つてほしい」と述べられ、「日向三代」の物語を読み進まれた。本居宣長の訓解に触れつつ、古代の人々の思ひを偲びながら、火遠理命と豊玉毘売命との出会いや御二人が歌を交はされる場面を身振り手振りを交へて辿って行かれた。

最後に、皇后陛下の「立太子札」の御歌に豊玉毘売命の歌の一部が引かれてゐることを紹介され、「古代から平成の御代まで脈々として国のいのちが伝はつてゐるありがたさを感じる」と講義を結ばれた。

### 〈第二日目〉 講義

### 「戦後論・共同体解体の六十年」

拓殖大学日本文化研究所所長 井尻千男先生  
先生は、まづ特攻隊の攻撃を体験したアメリカは「恐るべき民族で、背後に恐るべき共同体がある」と感じたと述べられ「共同体」について説明された。その共同体をど